
通学路

鎌堂成久

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

通学路

【Nコード】

N2845D

【作者名】

鎌堂成久

【あらすじ】

二つの視点から物語を見る。すれ違うその部分から何が見えるか。彼女の通学路は彼の通学路である。それだけ。

彼女の通学路 A面

その日、私は放課後、友人三名と帰路に着いた。2人の友人を家の前まで送り届けて、背の小さな友人と分かれ道まで歩んだ。

ちょうど急な坂道をくだるときに、友人が道路の脇に花を見つけた。

「おいでよー。きれいだよ」

友人が走っていくと、私を手で招いた。

「おお、ホント綺麗だね」

アスファルトの隙間から顔を出した、すみれ。私はそこで閃いた。

「この花、クロッキーしていい？」

友人に問いかけた。

「いいよ」とひとつ返事。

「ありがと」

私は肩掛けのバッグからペンと小さなノートを取り出すと、すぐにしゃがみこんで、すみれを描く。

私が描く間中、友人はブツブツとお笑いのネタを考えていた。ふと友人が一言のギャグを唱えた。私はすかさずツッコミを入れようと顔を上げた。

「あ」

ゴウツという轟音で言葉が掻き消された。私たちの隣を路線バスが通っていく。

私は何故だか、ほんのすこしそのバスを見た。

そして不思議な人を見た。

男子高校生たちが最後部の座席を占領している。

それから、楽しいな笑み。

だけど、私たちを見ていた。

ある一人の男子高生が、ガラスに顔をべったりと貼り付けていた。顔がべったんこ。

何故か、愛らしく思えた。

「ねえ、あのひとたち、こっち見てるよ」

私は、友人に思わず言った。彼女はそこまで気にしてはいなかった。

私は、顔がぺったんこになっていた彼を見た。少し離れると、彼らは喋りに戻ったように見えた。

彼と少しだけ目が合った。何か、嬉しそうで、でも………思いつめたような、そんな眼差しだった。

彼の通学路 B面

僕の朝は彼女を見ることで始まっていた。

高校への登校途中、いつも見かける地元の中学生たち。一年ほど前からよく見かけるようになった少女たちがいた。

三人組の彼女たちは、すばしっこそうな子と温厚そうな子、それに優等生のような子。どこにでもいそうなちぐはぐな組み合わせの彼女たちは、いつも僕と逆に道を行く。ほぼ毎朝、彼女たちは笑っていた。愚かな僕なんかとは違い、とても幸せそうでうらやましかった。

僕が一番嫉妬の感情を抱いたのは、優等生風の彼女だった。彼女がこちらを向いていないときに、僕は彼女をジッと見つめていた。彼女は全くぼくに気付いてくれなかった。気付かれたら大変なこともかもしれない。知らない人に罪の意識もなしに睨まれるなんて。でも僕は、心の奥底ですつと願っていた、彼女が振り向いてくれることを。

ある日、僕は急に考えてしまった。いつも僕はどうして彼女を睨んでしまうのか、と。

答えは簡単だった。いつの間にか、幸せそうな彼女が僕の心に住み着いていた、ただそれだけのことだった。そして、恥ずかしくなった。僕の行動がどれほど彼女に迷惑だったことか。その日から僕は彼女を見つめることがなくなった。

それから一ヶ月がたった頃、彼女が三人組から忽然と消えていた。

僕は、朝一緒に登校するたった一人の友人にそれを話した。

友人は驚いた。

「お前に、好きな子ねえ……。もしかすると家の事情で引越したとか、もっと早くに別の用事で登校してるとか。俺はただのすれ違いだと思っただけだ」

それ以来、友人は僕の恋愛相談に親身になって答えてくれた。時に僕は、

「お前は暗すぎる。友達作って明るくなりやがれ」

と言われ、友人の紹介で新しい友達をつくった。確実に僕の心は同年代の少年になっていた。

それから後のある日、僕は同級生に告白された。心は変わっても、根は一緒に僕は控えめだった。

「僕なんかでいいの？ 君がいいなら別にかまわないよ」

それにその子は頷いた。とうとう僕にカノジョが出来てしまった。でも、あの中学生への気持ち揺らいだわけではなかった。僕の心の炎は着実に大きく燃え上がり始めていた。

バスに乗っていた。彼女がいつものすばしっこそうな子を歩道と言っ歩道のない坂道の電柱の傍でしゃがんでいたところに遭遇した。

「なあ、あれってお前の言ってた子じゃねえの？」

朝の登校時の相棒が突然言った。僕はハツとして顔を上げて相棒が指す場所を見た。

でも、メガネがなくて良く見えなかった。

仲間たちが、公共の場というのに騒ぎ立てた。

「おー、アレ？　かつわいいのに目を付けたな」

「おおっ！　顔上げた」

僕は彼女の姿をすっかり見たくてポケットに手を突っ込んだ

「ほら、アピール！」

友人たちがぼくの顔を最後部の窓に貼り付けた。そのときの僕はさぞかし不細工だったろう。

でも、僕はそんなことは考えていなかった。僕はただ彼女に僕の存在を知ってもらいたかった。ただその感情で彼女を見つめ、そして、窓に必死で貼り付いた。

なあ、僕を見てくれ。

叫ぼうかと思ったとき、彼女と目が合った気がした。

そして僕は窓から離れて、心で伝える。

あなたが好きです。僕を覚えていて欲しい。

募り積もった思いは見つめあっただけで伝わったのだろうか。伝わらなくても良い。そう思った。彼女との出逢いはコレで終わりかもしれないから。

すると複雑な気持ちになった。それから、もう一つ伝えたい言葉があったのを思い出した。けれど、もう僕に彼女の姿は見えなかった。

そして、僕は笑った。僕を少しだけ変えてくれた彼女へ、その言葉を送りながら。

ありがとう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2845d/>

通学路

2010年10月28日03時47分発行